

〈名所案内〉〈旅行案内〉と文学史蹟 一一

小関和弘

——要旨

前稿^{〔1〕}に引き続いて、一九〇〇年頃から後の〈案内記〉（『鉄道名所案内』や『鉄道旅行案内』など）について、そのなかの文学関連の名所（歌枕類）・史蹟などに関する記述を検討する。鉄道が通じたから出掛けるようになったと見なせる女性・和田むめの『漫遊之友』、修学旅行での利用を当て込んだ『日本全国巡遊 学生／遠足 修学旅行案内』など、旅行の大衆化に向かう時代の中の〈案内記〉を通過する。また観光や出版——人や物の移動——などに影を落とす日露戦争後の社会変動が〈案内記〉の記述にどのように現れていたかにも触れる。

また、自然主義小説の旗手の一人で、紀行文学の大家とも呼ばれるようになる田山花袋の〈案内記〉の荒っぼさ、判型を含め趣向を凝らした〈案内記〉の登場などを概観する。そのような民間の〈案内記〉出版に対抗する形で、鉄道国有化後の鉄道院が立て続けに刊行した『国営の〈案内記〉の文化的位相も検討する。

出掛けるようになった人々／出掛けさせられた人々

前稿は柳田國男の『明治大正史 世相編』の「鉄道が通じたから出掛けるようになった」人々の存在に言及したところで擱筆した。

和田むめ『漫遊之友』（春陽堂、一九〇一年七月）は、その「鉄道が通じたから出掛ける」ようになった物見遊山客による一八〇ページの漫遊の記と言える。巻頭の写真掲載は一六ページにわたり、大小とり混ぜて四六葉の写真掲げる。漢文に傾斜した文語調で綴られた、パラルビの文章がそれに続く。

劈頭の「相模」の章は「鎌倉」の項から始まり、長い「鶴岡八幡宮」の記述を繰りひろげる。続けて「頼朝屋敷」「公方屋敷」と続き、その後「鎌倉五山」を丁寧で紹介し、以後、一つ一つの史蹟や名勝を一項目につき一〇〇から二五〇文字程度で記述している。

「江之島」の章で「龍口寺」「片瀬川」など旧蹟が紹介され、「児ヶ淵」では建長寺の自休僧都と白菊の悲恋の物語と和歌を紹介している。一方「採鮑」という項目では、客に銭を求めて鮑取りをする見せ物芸が書き留められる。続く「龍窟」では龍の住処という伝承を持つ岩窟内部を紹介し、末尾に佐羽淡齋の「江之島」を詠する七言律詩を引く。

この後「逗子」で「海水浴」に言及し、「大桶山」では万葉歌を引いて、山の眺望などを紹介している。以下、「横須賀」「藤沢」と進んで行くが、鉄道路線への拘りはないものの、東海道を西行するベクトルは、近世の上方始発のベクトルとは異なり、近代の旅行案内の大道に従っている。しかしながら本書では各駅ないし市街の名称が大きな括りとされながらも、当該の駅が始発の東京からのどれほどの距離にあるのかは示されず、また、駅からの交通の便などに関してもまったくと言ってよいほど関心を示していない。漫遊の記録たる由縁である。

「大磯」では駅云々の記述はまったくなく、次の「国府津」の場合と同様に、先ず「海水浴場」の項目から始まって、周辺の別荘などに触れながら景色の美しさを締めくくられる。その直後の「虎子石」では蓼太の「抱いて見る旅の戯れの虎子石」の句を掲げた後、曾我祐成と大磯の虎との恋情、工藤祐経の奸計などに触れて「虎子石」の由来を説いている。次には「鴨立沢」の項があり、「心なき身にもあはれはし」を引いて西行堂の歴史についても筆を延ばしている。

本書は旅の〈案内書〉というよりは、鉄道沿線各地の名勝旧蹟に

ついて、丁寧に故事来歴を記し、読み物として受け入れられることを主眼としていると言える。「小田原」で取り上げられる「矢立杉」「宗祇法師の墓」ともに所縁の和歌および句を書き留めているのなど、その表れと言えよう。また「箱根神社」の記述では祭神を列記した後は、「社記」全文を二、三段組みの一ページ半の分量を使って引用している。

こうして箱根、足柄を記した後、括りは「下総」で「市川」の記述から書き起こされ、房総の地を順次回って、「古河」「結城」方面へ到る。記述のスタイルは「相模」の章と同様で、名勝、旧蹟、社寺などを記し所縁の詩歌があれば必ずそれを引いている。しかもただ引用するのではなく、詩歌にまつわる故事や由来をコンパクトにまとめて紹介するのである。それで書ききれない場合には（例えば「滑河」の「児塚」項、「旧記」の記すところとしてその全文を引用紹介している）。

「結城」からは北へ廻り、白河越えに到るのでなく、記述は「安房」「上総」へと戻って行く。以後、「房総」の記述を終えると章立ては「常陸」へと移り、「水戸」の「第一公園」がその劈頭の地として描き出される。ここでは「日本鉄道の磐城線に搭じて水戸に至る」という鉄道の記述が第一文となつてはいるが、上野駅からの距離や時間などは一切触れられていない。続いて「筑波」「筑波山」へと進み「女化」の「女化稲荷」について、そこに伝わる老狐の報恩譚を詳しく記している。こうした民譚への関心は奇談への興味で終わることなく、「潮来」の項で、広く人口に膾炙した「潮来出島の真狐」の中に菖蒲咲くとはしおらしや」を引くと同時に『潮来図誌』への

言及を怠らないといったバランス感覚によって支えられている。

巻も終わりに近づいたところで、筆は「下野」に及び、「日光」の景勝地を順次紹介して行き、次に西那須野へ及んだ後、踵を返して「栃木」「足利」へと進み行く。そのあと「高崎」「磯部」と展開し「伊香保」「草津」などの温泉地を紹介してから「品川」「目黒」をめぐり、埼玉に飛んで「越ヶ谷」から「秩父の大宮」、また「小金井」「八王子」を巡っている。さらに「杉田」から「修善寺」「三島」と、東海道で扱い洩らした諸所に筆を進めて締めくくられる。

大略を記した通り、本書は東京を中心として関東一円の名勝、名所、古蹟、そして海水浴場という近代的な場所などを詳しく紹介しつつ、当該の土地に伝わる伝承や所縁のある詩歌とその由来などを丁寧に拾った一旅行者を視点人物とする記録と言えよう。こうした記録の背後には、すでに刊行されていた多くの〈案内書〉の存在があつたはずである。

前稿末尾で大衆受けを狙つたと思しき『避暑漫遊 旅行案内』に触れつつ、「広範な人々による旅行が行われるようになってきた」と記したが、その表れがこの和田むめだと言える。リテラシーに恵まれ、旺盛な行動力を持つこの女性は、実は本書の版元・春陽堂の創業者和田篤太郎の妻で二代目社長となつた「うめ」であり、奥付には「編輯兼発行者」として変体仮名の「むめ」名が記されている。それだけのキャリアを持つ女性であつたとは言え、一人旅をこれほど果敢に(?)成し遂げたのは、中世日本で遍歴した遊女たちの旅とはまったく異なる新たな時代の旅の形として記憶に値しよう(むめが実際には旅をせず、ゴーストライターが書いたものかとも思えなく

はないが、いまは書誌に従っておく)。

ところで、個人旅行が広がりを見せる一方で、学校教育の現場で——軍隊の行軍に準えつつ展開した——修学旅行もまた、〈案内記〉をたよりにする人々の出現を促した。学校教育のなかで、出掛けさせられた人々の登場である。

地理歴史研究会『日本全国巡遊 学生／遠足 修学旅行案内』(田中栄栄堂 一九〇二年六月)は、三〇二ページに及ぶ書冊で、「凡例」には

本書は学生の旅行する者に名所古蹟を探り又旅行中偶然奇勝明媚の風光の目に触れたる時其の如何なる名所古蹟なるやを知るの便に供せんと欲す(略)学生の便を主とするか故に其の名所古蹟を記したる下に於て著名なるものに限り別に記文を載せ或は詩文を掲げて一は作文の材料とし一は趣味を添んが為めなり

と記されている。

修学旅行生向きとあるとおり、広く知られたものや生徒たちが授業で学んだであろうと思われる古歌や古句、漢詩などが数多く引用されるほか、「浜寺公園ノ記」「桜井駅ノ記」「有馬温泉ノ記」等々、それぞれ古蹟の由来を記す碑文が全文引用されるのも、教科書と連動し「学」生に向けた設えと言つて良いだろう。なお、一般旅行者をターゲットとする『鉄道旅行案内』諸書と異なり、名勝や史跡へ駅からの道のりが記されるのではなく、直にその場所の説明が記されているのも、引率者抜きには行われぬ修学旅行ゆえかも知れない。

そして、この時期に野崎左文／州崎栄芳による『日本海陸漫遊の栞 東部編』(六々会、一九〇三年八月)と『日本海陸漫遊の栞 西部編』(版元・刊行年月共に同じ)という小型本が刊行された。『東部編』冒頭三二丁は写真ページである。「東北鉄道」から始めて青森に至り、沿線の駅間距離、駅近傍の名勝旧蹟を紹介する。

以下、鉄道路線に即して記述は進むが、記述の大半が同じ野崎左文の『全国鉄道名所案内 下巻』(巖々堂、一八九五年)および野崎『日本全国鉄道名所案内 関東之部』(春祥堂、一八九八年)と重なる。紙型が同じで、典型的には「羽村」の「水道碑記」がいずれも「全文を引く」とあるものの引用された碑文の途中にはしつかりと「中略」があり、その中略箇所までそっくり同じであるほか、「那須国造碑」は記述内容だけでなく、版面・レイアウト・パラルビの施された位置までまったく同じである。

ただし、左文先生の名誉のために言っておくと、『全国鉄道名所案内』と『日本全国鉄道名所案内』との間では「陸前浜海道線」や「富岡鉄道」「成田鉄道」などの増補があり、さらに本冊『日本海陸漫遊の栞』では、中間の「篠ノ井線」、そして「奥羽鉄道」が南線、北線に分割されたこと、「八王子線」「東武鉄道」「龍ヶ崎鉄道」の追加に加えて、北海道鉄道の記述があり、その後に二〇ページにわたる東部日本の航路の紹介が増補されている(ゆえに「海陸」の書名となる)。筆者が同じでも版元を変更しながら、増訂がなされたということがある。

本書では、適宜、鉄路や航路が書き込まれた地図を挟み、東北なら東北の全体像を掴めるようになっていいる。鉄道駅について、お

むね前の駅からの距離(マイル・チェーン)が示され、名勝・旧蹟に至る行程および距離、人力車の運賃等も記されている。また、町の人口や戸数も細かく記される。とは言え元版の数字が改められている例は少なく、紙型のままに従来の人口が記されたままになっている例が多い。元版と同様に景勝地や旧蹟に所縁の詩歌も引用され多少の補筆はなされるが、記述は簡略である。住民の少ない土地の停車場の中には隣駅からの距離が一行で記されるものも少なくない。

神居古潭ではアイヌの人々が振る舞ってくれる魚料理を記した後、それらの経験をした土地とその感慨を綴った五言古詩と五言絶句を石と木に刻み込んだとの記述がある。アイヌの文化空間に漢詩の世界が持ち込まれることに左文はいささかも違和の気持を抱いていない。

旅行大衆化の時代と軍国日本

坪谷水哉『日本漫遊案内 上巻 東半部』(博文館、一九〇三年九月、一〇年九月九版) 六三〇ページ。四六判。旅行鞆にちよつと入れているというサイズではなく、厚さも下巻(六三四ページ)と合わせると二二〇〇ページを超える超大冊。

博文館では編集局長などを歴任し、のちに日本図書館協会の会長も務めた著者・坪谷水哉(善四郎)はこの後、『海外行脚』(博文館、一九一一年)といった紀行文集を刊行するが、それに先んじて全国を漫遊した記録を『下巻 西半部』(一九〇五年)と合わせた二冊にまとめたのである。

巻頭には「代序」として幸田露伴の筆になる「旅の心得」を掲げる。冒頭で強調されるのは、「無学にして旅するは、たとへば夜行くか如く、すべての美しきものをも認めずして過ぎん」としている。「旅立たんとする前、地理の大概は必ず予め知らざるべからず」という忠言も記されて、案内書の効能を誇示しているのである。

坪谷自身による「凡例」は改版された第九版では樺太の記述に改訂を加えたこと、鉄道の延伸に伴う改訂などを注記する。

本稿の趣旨に即して言えば、「凡例」に「其地方に関する古今名士の詩歌等挿み」ながら書き進むとある点に特に留意したい。上巻冒頭「東京市内」の「東京の沿革」は「武蔵野は月の入るべきくまも無し草より出て、草にこそ入れ」の唐突とも言える引用から始まる。これは先例のあることではあるが、以下、太田道灌が詠んだ「我庵は松原つゞき海ちかく」との和歌を引くように、冒頭から「凡例」のスタンスをアピールしているのだろう。

「市内の漫遊」での名勝、名所の記述は他の〈案内記〉とほぼ同じだが、「遊覧の場所」として花柳界、角力、演劇、寄席についてその遊興の作法や場所などを紹介しているのは、本書が狙いとする階層を想像させてあまりある。だが、大きな活字で印刷されているが、解説文はパラルビ、漢語脈の文語体である。

「土産物の調進所」の項では、名物を列挙するのではなく購入すべき店舗と所在地が「袋物」「書籍」「錦絵」「化粧品」「浅草海苔」、そして「烟艸」「時計」「眼鏡」「帽子」「革靴」「洋傘」など、それぞれ丁寧に記される。錦絵が混じってはいるが、総じて近代的な小物が「土産物」として推奨されていることになる。こうした姿勢は他の

都市の記述でも貫かれる。また「勸工場」が近代的な正札販売だと注記し、値段の押し問答を避けられるとしている。

東京ゆえだが、他書では官公庁は名称だけを挙げているものがほとんどなのに対して、本書では外国の大使館も含め、一覽しやすいようにレイアウトされ、住所も記されている。「諸会社、銀行、新聞社」も「最も著名なるもののみ」と限定付きだが、列挙してある。

かなり使い勝手の良い内容にも思えるが、本の大きさはどう考えたらよいか迷わされる。

〈案内記〉のなかの詩歌を探る本稿の主意に即して言えば、広く知られていると思しき和歌は無難に拾っている点が本書の特徴と言える。

東京の記述で太田道灌の「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞくやしき」「かなしき」でなく「くやしき」とある）が引かれるが、それ一般読者への分かりやすさを主眼とすることの表れであろう、この和歌の「みの」の箇所には圈点を付し、掛詞である事への注意喚起が為されている。この道灌の逸話は江戸中期の隨筆集『常山紀談』に掲載されて、明治期に入ると、河竹黙阿弥の「歌徳恵山吹」（二八八八年）として歌舞伎の外題にも取り入れられ、あるいは初代林家正蔵による『落噺 笑話林』（天保四（一八三三年）にも八百屋でのやり取りとして記され、のちに高座に掛けられたものであった。そして、明治期には山吹の歌をめぐる太田道灌と村娘のエピソードとして中学校の教科書にも掲載されたように著名なエピソードであった。それが一般向きの〈案内書〉というべき本書に取り入れられているのである。このほか、『伊勢物語』東下りの段で

知られ、名物「言問団子」の名の由来ともなった「何しおはゞいざこと、はんど鳥」の歌もすっかり引かれている。

しかしながら「古今名士の詩歌等挿み」と、一般読者に分かりやすくという趣意(?)の垣間見える本書の選歌法が一貫しているとは言い難い。近畿地方(下巻)の「道成寺」に続き「由良港」が取り上げられるのだが、そこには「為妹玉乎拾跡木国之湯等之三崎二此日鞍四通」と万葉仮名そのままで歌が引かれる。次のページ「結松」の項で、有馬皇子が処刑の地へ向かう折に詠んだとされる「岩代の浜松が枝を引結びまさきくあらば又かへり見ん」は読み下して掲げていることとのバランスの悪さは否めない。こうした疑問点があるとは言え、土浦付近の西子岡公園にある翠松亭の「八景」の和歌を全首引用するように、和歌の世界への親近度は高い。

この書冊にはかなりの数の和歌俳句が引用される。が、それに加えて「閻魔前なる茶屋の嬢、あれを地獄へやらぬは、去とは閻魔のよてひいきじゃア」(新潟相崎近傍)などの俚謡も少なくない数が引かれている。

一方で、歌枕として著名な例えば「和歌浦」でも「今は昔日の海中にして人家田圃となれる処多く、只、玉津島明神附近に往昔の面影を彷彿し得るにとまるのみ」と現在の光景に対する否定的評言を置き、万葉集以来の証歌は一首も掲げない。むしろ紀三井寺に渡る舟について語るついでに「陸路を迂回すれば、犢鼻褌の渡と称する渡津あり」とフンドシの語を持ち出す始末である。そのあと「此辺は紀淡海峡の要塞地とて、写真禁断の場所なり」という軍国日本の実状に目をむけさせている。

そのような同時代の社会への視線で言えば、「那智瀑」の次に「樫野浦の記念碑」の項を立てて「樫野浦は明治二十三年九月、土耳其の軍艦エルドグロール号が沈没したる処」と書き、「一基の記念碑を建つ」として「特派公使陸軍少将オスマンパシャ以下五百八十一名の遺骸を葬れり」と誌している。単なる過去の史蹟や景勝を書き連ねるのとは異なった、時代に即応した姿勢が見られると言つてよいと思う。

続く『日本漫遊案内 下巻 西半部』はおおよそ一年半後の一九〇五年四月に刊行された。上巻と同じ中判で六三四ページ。この下巻では、日露戦争下という時代を如実に反映して、名勝の他に軍港や軍事施設など、軍隊に関する記述が増えている。上巻と較べると引用される文学作品には漢詩が非常に多くなっている。和歌も鹿兒島の章で引用されるのは宮内省歌道御用掛を務めた八田知紀の「^{つるま}真劍^{つるま}の形なせれば是もまた国を守りの神ならずやは」といった戦時日本を承けた益荒男ぶりの作品になつてくるのである。

坪谷著と踵を接して同じ版元から刊行されたのが、八木装三郎『学生必携 修学旅行案内』(博文館、一九〇五年八月)である。六七八ページに及ぶ大冊。「凡例」で八木は「本書中に加へたる詩歌は単に因みある類を主として敢て和漢の別を撰ばず、又其土地に關せざるも皆な之れを採用せり、但し右は成る可く吟詠の容易なるを主とし、彼の字句の巧拙は措て顧みざること、せり。」と述べる(傍線引用者)。また、「題して修学旅行案内と云へども猶右以外の人士に向つて参考^に供し得可く」と一般人向けの書冊でもあることを明言

している。

「学生必携」とあり「修学旅行」の語を掲げるが、修学旅行に特化した書冊とは言い難く、「凡例」にあるとおり、歴史や地理などの教科書と類似した記述が大量に取り入れられている。全国各地を対象としていた前掲の『日本全国巡遊 学生／遠足 修学旅行案内』（一九〇二年）とは異なり、地域は「関東八州」に限られている。東京市内の寺や関東一円の著名人の墓所一覧や関東一円に存在する板碑の一覧など、修学旅行のスポットとはなりにくいものも列挙されていることと照応するように、旅行のルート決めとの参考となるコース・プランなどは記されていない。

また城郭の形式を説明する文章の後には「古城址一覽」が、古建築の諸形式を説明する文章の後には「古建築物一覽表」がそれぞれ付されている。

「高山一覽」の後に貫之の「足引の山辺にをれば白雲の」の歌の他、杜牧の七言絶句、僧貫休の五言絶句に加えて、芭蕉の「山路来て何やらゆかしすみれ草」が置かれているが、本文に記された土地と所縁の深い詩歌が取り上げられているわけではない。この他、随所に白居易の詩や広瀬旭莊の詩が引用されるが、前掲の事例と同様にその場との縁に関わるわけではない。その地に赴く旅行の内実を充たすこととは別個に、国漢の教養として身につけるにふさわしいと編者が考える詩歌が並べられているのである。

その一方で、巻末の「秩父浦山の土俗」の章のように当該地域の自然や農耕、食、服飾などの生活、葬祭を含む風俗習慣などを記述した民俗学的（同書中では「人類学的」の語が用いられている）記述

も含んでいる。こうした点で、前掲の『日本全国巡遊 学生／遠足 修学旅行案内』とは性格が大きく異なっている。

本書は巻末に「旅順と修学旅行」（有賀長雄）を付す。日露戦争の時代を反映した「修学」「旅行」の政治性を濃厚に示している。この点は同時代の鉄道案内や地理案内類の他書にも見られる。政治と無関係な「旅」はなく、政治や経済に振り回されない観光はないというところに注目するのは、政治に近いにもかかわらず、それを表に出そうとしない現代の「観光論」ブームへの批評とも言いうる。

花袋先生 ごらん作

小説『蒲団』（初出「新小説」（春陽堂）一九〇七年九月）で日本の〈自然主義〉文学の一翼を担うことになり、紀行文学の大家としても勇名を馳せる田山花袋の『日本新漫遊案内』（服部書店、一九〇六年八月）は四一六ページを費やす大著である。この場合、「大」には「たいしたものだ」の驚きの意をも込めておく。

鉄道路線に沿って都市、町村と名勝、史蹟を紹介するスタイルは他書と変わらないが、引用される文献や言説の中に「Handbook for Japan」の筆者の言葉があったり、榛名山について

日本に於て此地ほど野花に富みたる地はあらず。六月より九月に至る間、至珍なる百合科の花頗る多く、虎百合其他の百合、

杜若科の種々なる色ある花 Clematis, Spien, Hydrangen, funkia, Asters, Campanulas 其他種々なる珍草異卉到る処に咲き、真に

楽園のごとき感を起せり。春遅く、五月の頃には鶯駒鳥の歌谷
間より谷間に響き渡る……

とする「マウレーイ」の言葉——モウレーと表記は変わるが「磐
梯山」の箇所にも引用がある——など、外国人の日本に対する評言
を用いているところが一つの特色と言える。

もう一つの特色は、土地土地の概要を花袋の言葉で説明したうえ、
それに続けて活字の号数を落とし、かなり長文になることもいとわ
ずに様々な引用が挿まれるところである。

例えば、両毛鉄道沿線で取り上げられる「桐生町」と「足利町」
の場合、どちらも二ページ四〇行に近い『大日本地誌』からの引用
が付されている。他にも岩手山、出羽三山、あるいは箱根山に関わ
って『大日本地誌』からの引用があるが、岩手山関連の記事には
『日本風景論』(志賀重昂)からの引用も含まれている。志賀著からは
鳥海山への登山を記した箇所も引用している。

こうした他書からの引用のほかにも当該地から近傍の景勝地へ抜
ける道の紹介や社寺、旧蹟の説明などが注釈的に小さな活字で組み
込まれている。その数は夥しく、本書の情報量を飛躍的に増大させ
ている。

那須では殺生石にも触れるが「かの有名なる殺生石は湯本にあり。
石は高さ五尺許柵を繞らして人の近づくを禁ぜり。」とあるだけで、
芭蕉の句の引用などはない。

常磐線高萩駅近傍では水戸の義公(光圀)作の五言律詩の引用が
ある程度だが、さすがに東北線の白河駅では能因法師の「みやこを

ば〜」は無視できなかったのだろう。平兼盛の「つてあらば都の人
につげやらんけふ白河の関は越えぬと」の古歌とともに言及してい
る。しかし注釈的な小さな活字部分での紹介にとどまるのである。

松島では野崎左文が『東海東山畿内山陽漫遊案内』(二八九三年)
に引用した、著名な「衆美婦松島、天下無山水」との瑞鳳寺住職・
南山禪師の句が引かれるものの、芭蕉の句への言及はない。牡鹿半
島に進み、金華山に話頭が及ぶとみちのくで黄金が発見された際に
大伴家持が詠んだ長歌に付した「反歌」「すへらぎの御代栄えんとあ
つまなるみちのく山にこがねはなさく」が仰々しく二行に分かつて
書き記されている。そしてこの項の最後に大赫々溪の七言絶句を引
いて終えている。

平泉では芭蕉の「五月雨の降り残してや光堂」句を紹介しないわ
けに行かなかつたのだろうが、これまた注釈的な小活字の欄に入れ
てあり、続けて蝦夷の長・阿弓流為アテルイに比定される悪路土の「拠点」
達谷窟にも触れている。ほかに『吾妻鏡』からの引用もなされる。

中山峠の記述では西行の「東路のあひの中山ほど狭み心の奥の見
えはこそあらめ」を引いている。青森に入り三本木原では橋南谿の
『東遊記』(一七九五〜九七)からかなり長い引用を行って、記述の助
けを得ている。先回りして言えば、青森駅の先、未だ鉄道が通じて
いない三厩に触れた箇所でも花袋は橋南谿の記述を「興味多けれ
ば」として、長い引用を行っている(青森駅では善知鳥神社にも触れ
るものの、ただの一行で打ち切っている)。さらに大きく先回りして
言うと、花袋は「伊豆下田」の項でも『東遊記』からのかなり長い
引用を行っている。

約一年後に刊行された本書の二版（一九〇七年八月）ではこの青森周辺の記述の箇所には芭蕉の「くたびれて宿かるころや藤の花」句とともに三宝荒神を付けた馬に乗る子連れの旅人たちを描いた図版が差し挟まれる。「くたびれて」の句は芭蕉が江戸から京へ向かった「笈の小文」のなかの句だからあまりに場違いで、何故にここに挿入されたのか理解に苦しむ。こんなところにも、この案内書の文学的「伝統」との関わり方、「伝統」の創り方が表れていると言えそうである。

三陸海岸に触れては「全く旅行家より閑却せられたる」とし「されどこの海岸記すべきことなきにあらず、風景はまたすぐれたるところ多し」と記している。花袋のかつての盟友柳田國男が三陸に足を踏み入れ、「浜の月夜」（『東京朝日新聞』）に記した、太鼓も笛もない「寂しい踊り」を見物するのは一九二〇年の旧暦の盆のころ。そしてその旅を「清光館哀史」（『文藝春秋』一九二六年九月）に回想的に記すのは、この案内記が刊行されてから二〇年後のことである。六年を隔てて再訪した柳田の目の前に広がっていたのは、「影も形もなく、石垣ばかり」となった清光館の「遺跡」であった。関東大震災で東京・横浜など都市が大きな被害を受ける時代の裏側で、案内記に頼らずに旅をし生業を立てる人々の礎がひっそりと閑さされていったのである。

さて、『日本新漫遊案内』に戻るが、秋田に関連しては誤りが目立つ。「角館街道」のルビが「つのためたてかいどう」となっていたり（二四三ページ／再版も同ページ）、秋田城址である「千秋公園」を「千歳公園」（「ちとせこうえん」とルビがついている）と記し、細字での

説明文でも「千歳」のまま見落としているのである。

秋田市の位置から見ると南北に泣き別れになる二カ所を一括りにして「象潟と男鹿半島」の項を立てるといふ乱暴なまとめ方もなされている。象潟については、地震による隆起のため景観が損なわれたことを言い、西行に言及し、芭蕉の「象潟や雨に西施がねむの花」を細字の箇所で紹介している。そこから突如、陸前浜街道に飛び、「勿来関」では源義家の和歌の一節「道もせにちる」を「庭もせにちる」と誤って引用している（本歌「吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山桜かな」。この誤りは増訂版でも直されていない）。

東北を終えて、「第貳編 中部」となり、第一章は「東海道」から始まる。小金井の桜には一言触れるだけで、当該地に関わる和歌にはまったく触れず、横浜では、交通に関して官線・私鉄に簡潔に触れるが、目を引くのは「内国航路」に始まり、その海路程をも記しつつ多くの航路を紹介する「外国航路」の欄である。

しかしこの記述は花袋のオリジナルではなく、彼が本書でしばしば引用する山崎直方、佐藤伝蔵著の『大日本地誌 卷一 関東』（博文館、一九〇三年一月一七日発行）での横浜港に於ける内国外国航路の一覧から若干の文言を削除して、そのまま引つ張ってきたものと見える。船会社の配列順、航路に関する説明の文言、そして海路程の記述の一致は引用というレベルを超えている。

鎌倉に関する記述は短く、『吾妻鏡』からの引用もまじえるが、古歌、俳諧への言及はまったくない。新田義貞の事績や白菊の悲話には手短に触れている。

大磯では軍医総監松本順に言及しつつ、当地が海水浴元祖の地で

あるといった紹介があった後、鳴立沢の西行の歌と西行庵、木像のことに及ぶ。力点の置き所を見定めるのは難しいが、やや海水浴の方に分があるように見える。だが、実はこの松本順云々の箇所も『大日本地誌』の文章と重なるところが多く、ほとんど盗用に近いとさえ言える。そして花袋がそこに付け加えたのは、ほぼ西行の和歌だけという具合になっている。

富士山に触れた箇所では山部赤人の長歌を引くと共に同時代の遅塚麗水『不二の高根』からの引用を挿んでいる。

興津では三保の松原を景勝地としてあげるが、和歌の引用はなく、一言「羽衣松は今猶あり。」と記されるだけである。そして静岡市に入り、少し過ぎたところにある宇津谷峠に触れて、「伊勢物語に、宇津の山辺のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけりと歌ひしところにて、その古蹟は街道より少しく山には入りたる処に残れり」と記している。和歌の上五を引かない書きぶりにいささか引つかかるものを感じないでもない。似たようなことは「小夜の中山」にもあって、「命なりけり小夜の中山」の古歌を引くかと思いきや、夜泣石をめぐつての久延寺の開山譚が記されて終わっているのである。

「新井」では潮見坂の風景の美に及んで「立かへりいく年波かしのばれし潮見坂にて富士を見し世を」の足利義教の歌を引く。さらに進んで伊良湖岬では芭蕉の「鷹一つ見つけてうれし伊良湖岬」の句が刻まれた碑に触れている程度である。

本書は前述のとおりポイントの小さい活字を多用している。それゆえ、見かけのページ数以上に文字情報の量は多い。だが、かなりの部分が他書からの引用であり、カラーージュと言っても差し支えない

い。文学者・紀行文家として一家を成した田山花袋の輝かしい業績には数え上げるのがはばかれる代物ではある。

本書はかなりの売れ行きを見せたらしく、前述の通り増補二版が刊行されている（一九〇七年八月）が、その「自序」に花袋は次のように記している。

旅行記は宜しく絵画の如くなるべく、案内記は宜しく地図の如くなるべし。旅にありては旅行記無くも事は或は足りなん、されど案内記なきは地図携へぬと均しく、其不利たる実と言ふに堪へざる憾のあり。旅行記は文学なり、案内記は地理なり。旅行記は空想にてもありぬべし、案内記は断じて事実ならざるべからず。吾人年少より漫遊を事とし、常に精良なる案内記に渴すること甚だし。かの西洋の旅客の携ふるベデカーほどのもの、わが国にあらば、其便いかならんとはわが口癖に言ひて止まざりし所、吾人をして一種の案内記を編むの念を起さしめしは、この不便実にこれが動機たりき。されど、吾人の如き地理的素養に乏しきもの、いかでか地図のごとく精確なるものを編し得べきや。業、中途にして屢々筆を擱き、ひそかにわが足跡の至らずして、誤謬を世に伝へんことの如きを恐れ、且つ忸怩として其の大胆なりしを悔めり。しかも書肆の督促急に、今や其の半部を世に公にせざるを得ざるに至れり。豈に、此の零細なる案内記を以てベデカーに比するの勇氣あらんや。

況んや精確なる地図的案内記をや
花袋

とある。

案内記を文学領域の旅行記から切り分け、世界中で優れた案内記として高く評価されたベデカーをその範として挙げつつ、あるべき案内記の姿を述べる花袋の志は高い。しかし前述のとおり、そして花袋自身が危惧しているとおり、その出来はさほどのものではない。「地理的素養に乏し」い故ばかりでなく、急いで出版したいと考える版元からの要求もあって、完璧なものを作れなかったことを悔やんでいることが伝わってくる。

振り返れば、「凡例」の第五項には「本書は先づ関東地方、東北地方、東海道を描きたり。東京市の案内は別に其種の案内記多きを以てこれを省きたり。下巻には京阪地方を主とし、北陸、山陰、山陽九州、四国等を記述する予定なり」とあった。しかしこの後半の「下巻」は刊行されず、その事情を承けたかたちで、増補版巻頭の付記「増補につきて」には「昨年世に公にしたる、新漫遊案内を再版するに當りて、京畿地方を増補したり」とあるように、初版はかなり性急且つ粗製を甘受する形で生み出されたと考えられる。粗製を甘受した形で刊行せざるをえなかったのは、徐々に盛んになる世間の旅行熱に乗り遅れまいとする版元の意向が大きかっただろう。翌年に再版が出た事と併せ、それなりの需要があったことが見えてくる。

再版では馬場停車場近くの義仲寺の箇所で「木曾殿と背中合せの寒さかな」の句にあっさりとしか触れていないように、初版同様に文学的伝統への距離を保っている。京都に入ると『平家物語』から

の引用があるものの、伝統の祭や儀式、歴史的対象への言及が多く、そこから文学的な詩章、章句が展開するというスタイルが取られているわけではない。むしろ歴史とは関係なしに、祇園八坂あたりに記述が及んだ際「行き違ふ舞子の顔やおぼろ月」という紅葉山人（尾崎紅葉）の句を引く程度のことである。のちに花袋はこの句を自身の長編小説『田舎教師』（一九〇九年）のなかにも引用している。

これはもう、歌枕的な文学伝統を踏まえるのではなく、自分たち「同時代作家」の文学共同体の内輪話に近づいていると言つてよいだろう。そして、「花多き西のみやこの寺めぐり一日は雨もうれしかりけり」という花袋自らの詠歌を、細字部分とは言え、掲載する姿勢には文学伝統への親近を讀者に促そうという姿勢よりも、花袋自身の自己表現、京の寺めぐりから花袋先生の受けた感動が滲み出るばかりである。

そうした文学伝統へのやや雑なアプローチ振りは、淀川べりを進んで交野の原に触れた箇所、新古今集所収歌「御狩する鳥立の原をあさりつつ交野の野辺に今日も暮しつ」を作者名（法性寺入道前関白太政大臣藤原忠通）に一言も触れないで引くところにも垣間見えるようである。歌の作者はどうでもよく、当該の地にふれたものでありさえすれば好かつたのであろう。

大阪市内に入つては「一部を引かん」と言いつつ五ページ余にわたつて『大日本地誌』からの引用を行っている。その本文中には荒木田久老が寛政二二（一八〇〇）年に出した『難波旧地考』からの引用も混じる。そして細字での記述のなかには「風流韻事に乏しく到底此地に來りて樂しむといふことは不可能なり。要するに俗地な

り、「利に敏にして、情に薄き（略）近郊に遊覧の地乏しきは大欠点とすべし」との厳しい文言が書き込まれている。とは言え、後続する記述のなかには空海の開基と伝えられる古刹太融寺や北野天満宮の紹介も為されていて、記述の統一性があるかないか、何とも不思議な〈案内書〉となっている。また神戸付近の記述ではかつての福原遷都に触れて、鴨長明『方丈記』のいわゆる「都遷り」の章段から「故郷は既に荒れ果て、新都未だらず」にいたる六行余の引用もある（「故郷」は「古京」が正しい）。

走水を過ぎ生田宮村に触れた箇所では、生田神社の森の前に広がる六町余の「生田の馬場」近くの堤防には梅桜の季節に遊客が多く集まるとし、里人の歌う「ばばじゃばば」と云はんすけれどこんな馬場でも花が咲く」という俚謡を引用している。これは本書中で唯一の俚謡の引用である。

こうした融通無碍とも言える記述スタイルは、本書末尾ちかくの神戸開港に触れた箇所でも發揮される。勝海舟の建議による小野浜への海軍官所設営構想から説き起こし、英米仏蘭による下関砲撃、幕府を威嚇する目的での四ヶ国の連合艦隊による神戸投錨など、かなり丁寧な記述が行われ、その後、周辺各所の紹介があつて、本書は唐突に終わっている。

固定読者がいるわけでもない〈案内記〉の市場は手探りで出版の業が展開したと考えられるが、それにしても五〇〇ページを越す書冊をごく限られた土地への旅行のために入手し、使用する読者が果たしてどれほどいたのだろうか。だが、版元は刊行を急ごうとしていた。それは前掲の花袋の「自序」に記されていたとおりであろう。

本書の初版、再版を含めその刊行部数が分らないので何とも言いがたい点はあるが、版元が視野に収めていたのは——鉄道国有化による利便性の拡大なども勿論あつただろう——この時期以降、増加してゆく都市の新中間層とその可処分所得や行動圏の拡大ということだったのでないだろうか。

花袋から多彩へ 様々な〈案内書〉

花袋が代表作『蒲団』を発表した同じ年に、尾崎紅葉門下の四天王の一人小栗風葉、のちに俳諧研究者となる沼波瓊音、そして花袋さらに画家の立場で花袋と同様に日露戦争に従軍した小杉未醒庵庵という四人の共著で『東海道線 旅行図会 新橋 神戸』（修文館 一九〇七年七月）が刊行された。和本の「横中本」に近いサイズ（縦一三センチ×横一九センチ）で二〇七ページの書冊である。長くなるが重要なので「はしがき」の全文を引く。花袋に倣ったわけではない。

近時鐵道交通の利便全國に偏くして萬斤の重、幾百の衆、一時に能く千里を往復せしむと雖、其れ唯利便のみ、迅速のみ、旅趣の乏しき、却て傳馬昇駕の風情ある昔に劣り、途次の倦怠、川留の立場に霽れやらぬ霖雨を侘ぶるよりも甚だし。翻て思ふに、旅趣の乏しきは敢て鐵道旅行の罪にあらず、途次の倦怠は豈汽車の客たるが故ならむや、迎へて旅趣を解し、探ねて倦怠を慰むる設備の供せられざるが爲めのみ、茲に見る所ありて本

書の發行を企つ、其内容たるや、在來の線と點とを以て描かれたる簡單の下瞰圖、乃至は地名と里程とを以て綴られたる杜撰の案内記類と異り、活きたる圖譜、能辨なる案内書、旅客の深切なる道連たると共に、或は學者となり、詩人となり、通客となり、旅行の有らゆる趣味と智識とを網羅し盡さむとするものなり、各鐵道に沿へる兩邊の眼界車窓の展望山水田園、市街村落、名所古跡其他公私の建築物より、風俗習慣の異に至るまで、

悉く繪畫を以て實寫し、間々歴史傳説の興味ある圖解を以てす、一卷眞を盡せる道中繪卷物にして、又密を凝らせる一幅の風景パノラマなり、加ふるに科學の正確なる解説と、詩的の多種多様な文學とは、繪畫と相待ちて本書の特色とす、地理、歴史、傳説、口碑、自然と人事と、一丘一水の小と雖も要あるいは説いて盡さざるなく、或は古今の詩歌文章より、自他の觀察批評、教訓あり忠言あり、警句あり、諧謔あり、語つて意味あるは路傍の一廣告と雖も逸せず、一面忠實なる旅行記たると共に、一面詩趣ある人文誌たるを期し、啻に旅行の好伴侶たるのみならず、傍ら地理歴史の有益ある参考書たるべく、兼ねて詩文を愛するもの、繪畫を志す者の札（机）上必備の良書たるを期せり

明治末夏

著者識

書名にあるとおり、新橋を發つて東海道線を西に下つてゆく記述法である。見開き一二ページを含む一四ページの東海道線沿線を俯瞰した赤黒二色刷の挿画（小杉未醒（放庵））と一ページだけの

「新橋駅発車時間表」を挿んでいる。そして新橋―神戸間を十一区間に分割して、挿画のページと時刻表、そして各地に関わる事柄を記した文章がそれぞれ一つずつまとめられている。土地の文化的諸相や風景、あるいは古典籍からの引用も含んで、花袋、風葉、瓊音が分担した長短さまざま文章が並ぶ。単に故事に言及した文章もあれば、その地に足を運んだ筆者の感懐や批判を盛り込んだ文章もあり、読むものを飽きさせない。

二色刷の挿画は対象地域を斜め上方、東海道に対して南方（實際の空間に即して言えば太平洋上）から鳥瞰したものとなっており、その点では一八八三年刊の岡次郎編『大日本道中記大全』（求古堂版）に挿入された鳥瞰図と共通する。しかし『大日本道中記大全』では各駅間の道筋を細線で描き、その距離を「〇リ〇丁」と記してあるに過ぎなかったのに対し、本書では名勝や旧蹟についての短い説明文だけでなく、図中の適切な場所に和歌や俳句が配されている。実用的な〈案内書〉というよりは机上に置いて空想の旅を楽しむ読み物と言うべきであろう。こうした実用性を少しばかり離れたものが〈案内書〉の世界に出現した点に、旅行案内書、そして旅行そのものの転換期が示唆されていると言えないだろうか。こうした流れのなかから、紀行文学の「大家」田山花袋が出現するのである。

多様な〈案内書〉が出現するなかで、より実用的な、つまり旅するために役に立つことを目的にうたうものも登場する。伊藤銀月『旅行者玉鑑』（博文館、一九〇八年四月）である。一八〇ミリ×一一ミリ、三六二ページの体裁である。多くの旅行経験を持つと自負

する伊藤銀月（二八七一―一九四四）が、多種多様な旅人にむけて、病気や事故など旅中のさまざまな事態に対処できることを目指して書いた「旅行心得」書である。なかに「旅人の種類に就ての心得」の章があり、その五番目には「旅行と文学者」との節を置いている。

文学者の旅行は詰まりどうでもいゝやうなものゝ、旅行と自己の天職との関係を明かにすることは、如何なる場合に於ても必要也、詰まり、文学者は旅行の価値を讀書と同じ重さに見るべし、旅行は文学者に取りて最も大事也極めて真面目なる事業也之に依つて頭脳の文学的生産力を豊富ならしむるの糧食也、薬餌也、旅中の態度は、謹肅にして誠実に、五官に触るゝ物に對しては、極めて熱心に応接すべし。

とあつて、文学者が旅行する事によつて自らの文学作品創作が活性化すると揚言する（傍線引用者）。「文学」概念を含め、銀月の言うところが正鵠を射ているかどうかは措くとして、こうした職業別の旅行の心得が書き記されているゆえに、鉄道路線毎の名勝や旧蹟などに触れることはなく、したがつて古歌や文章の引用もない。

一方、神谷市郎（有終）編『東海道旅の友 車窓の名勝観』（博文館、一九〇九年六月、縦一八〇ミリ×横一〇三ミリ。一五六ページ。紙装四十五銭）は、同じく博文館から刊行されているが、名所旧跡の記述についてみると、伊藤銀月のものとは異なる編集スタイルを採つた書冊と言えらる。

「序」に

旅行は真に愉快である、（略）自然と心が晴々しくなる。（改行）然し、昔は十日を費した道程が、僅か一日の汽車で行かれる世となつては、勢ひ汽車旅行勝である（略）それ故眼前に名蹟旧址があつても、無意に過ぎ行くことが多い、試に幾千幾万を以て数へらるゝ毎日の乗車客が、車中で何をして居るかを見ると、多くは無聊で新聞を幾種となく読むか、左なくば大抵居睡である、編者も屢々汽車旅行をしたが、窓外に由縁あり気な社や寺や河や山やを見ても、それが何の社か寺か河か山かが知れない（略）、由縁の知れない社や寺や、見当の附かない旧蹟や名址は、一向興味も起らない、矢張り新聞か居睡かに過ぐすより外に手段がなかつた。

と記されている。車中の無聊に関する記述は、あたかもW・シベルプシュ『鉄道旅行の歴史』に見られる記述を先取りしたがごとき指摘である。

そしてそうした無聊や居眠りへ傾斜する乗客の興味を窓外の風景景物に引き寄せようというのが本書の目論見であることが語られる。本書の合間合間には「品川駅より見たる品川湾」（高村真夫筆、「鈴川駅より見たる富士」（石井柏亭筆、「京都七條停車場附近より見たる東寺」（河合新藏筆）といった彩色画が折込で添えられるほか、然るべきページの上には車窓の遠くに見える山並みの線画が挿入されていて、この書冊を見ながら（しかも、下り列車を基本として右の車窓に見えるか、左の車窓に見えるかも明記している）、車外の名勝を楽し

めるよう工夫がなされている。

だが、本稿の主意に即して言っておくべきなのは、多様な文学作品への言及、引用も本文中に織り込まれている点である。『海道記』『東関紀行』『曾我物語』あたりの行文が紹介されるのはこの径路からすれば当然と言えるが、ほかに『廻国雜記』からの引用や頼山陽、龍草蘆、森春濤の漢詩、菅原孝標女、隆経、松尾芭蕉や里村紹巴、与謝蕪村の俳句のほか、『諸国里人談』『今昔物語集』『東海道名所図会』『源平盛衰記』からの引用など、文学書、史書からの引用は枚挙に暇がない。解説の本文中に引用してある場合もあれば、駅毎の記述の最後尾に活字の号数を落として、和歌や謡曲が引用されている場合もある。そればかりでなく岐阜の枇杷島駅のあたりに関する記述では「里人伝説」として駅近傍の本宮山、尾張富士の二山にまつわるその土地の俚諺伝承の類まで紹介している。

本書は爆発的な売れ行きと言うほどではなかったようだが、それでも一九〇九年の初版から一九一八年の七版までほぼ一年に一回、版を重ねている。博文館という有力な版元から刊行されたというだけでなく、「序」に掲げた車中の無聊をなぐさめる目標が読者に受け入れられたゆえであろう。単なる〈案内記〉ではなく、ターゲットを明瞭にした出版の成果と言えるかも知れない。

鉄道院〈案内記〉のスタンス

鉄道輸送の現場を担った鉄道院も上に見てきたような〈案内記〉の叢出に対して手を拱いていたわけではない。『鉄道院線沿道 遊覧

地案内』（鉄道院、一九〇九年六月）は末尾に折り込みの「鉄道線路図」を挿む八〇頁立ての小冊子である。ほぼ全ページに最低一枚は写真を配し、沿線の名所旧跡だけでなく、信越線「碓氷の東西」の章では「汽車碓氷の隧道に入る」という鉄道院ならではの写真を掲げている。九州線の「筑紫路」で宮崎宮近傍の「千代の松原」を撮った写真は、中央奥に向かって鉄道線路が延びてゆく構図で、鉄道院ゆえに許されるであろう線路脇の犬走りに立って撮影されたものである。

東海道線、横須賀線、中央西線、北陸線から始まる記述は「湘南の風光」——本書では鉄道線区の名称を章題とするのではなく、「湘南の〜」のように各々該地の特色を表す「章題」が附けられている。そしてその見出しは本文の味気ない明朝体とは異なり、流麗な行書体で記されている。後述の和歌の引用法と併せ、本書にはレイアウト上の工夫が各所に見られる——の章を冒頭に据えて、「湘南 一帯の風光、なんぞ人の心を引くことの多き」と、東京（駅）からではなくストリートに景勝地、江ノ島・鎌倉の紹介へ筆を進めている。鎌倉大仏の写真のすぐ近くには正岡子規の「江の島や薰風魚の新しき」を掲げ、続いて与謝野晶子の「鎌倉やみほとけなれど」の歌を「釈迦牟尼は」とある本歌を「大仏は」と訂した形で引用している。続く浦賀、横須賀辺りに触れた文章では日本武尊と弟橘姫の走水にまつわる神話に触れ、弟橘姫の歌とされる「さねさしさがむの小野に〜」を引く。だが、その直後には藤沢から大磯にいたる辺りが「海水浴地として知らる」との記述が続ぎ、時間の往還は自在に為されている。これらの記事の真上には「大磯海水浴場」の写

真が掲げられていて、その後、鳴立沢では西行の「心なき身にもあはれは」を本文中に引用している。そして、本章の最後は『海道記』所収の「大磯や小磯の浦のうら風に／ゆくとも知らずかへる袖かな」が引かれている。西行歌のような例外を除いて、本書中に引用される和歌は二行に分ち書きされていて、各々のページで写真に次いで読者の目に飛び込んでくる設えとなっている。詩歌の引用にかなり濃やかな神経を使っているように見える。

沿線の主な温泉地、景勝地などを紹介する文章では、駅からの里程を細かく記すことはなく、「○○より何里」といった式の記述が主である。東北線（「日本線」と国有化以前の名称が使われているが）で那須近辺に触れた箇所では、道路の平坦さを指摘するとともに尾崎紅葉が此の周辺を「車を駆りて」周遊した際の紀行文を約三行にわたって引用するなど、鉄道にこだわりすぎることもなく、記述は自在である。

巻末の「路線図」の後のページには「鉄道院運輸部」名で「今般当院に於て院線沿道遊覧地案内編纂仕候に付一部供貴覧候（略）刊行を急ぎ候為め選ぶところ粗にして漏れたる勝地も亦多からむと存候これらは以後刊を改むる毎に増補修訂可致考に有之幸に御旅行の参考とも被成下候はゞ本懐不過之候」という刊行の趣意が記されている。この「以後刊を改むる毎」との文言は遵守され、翌年、『鉄道院線沿道 遊覧地案内』（鉄道院、一九一〇年六月、非売品）が刊行された。前年の版と比べ二二六ページ＋「廻遊旅行の葉」二〇ページという三倍近いボリュームに改めての刊行である。縦二四六ミリ×横一三五ミリ。横本を縦型にした体裁で、綴じの飾りに紫色のひも

を使い、独自の仕立てになっている。「宮城礼拝」を称揚する「帝都及附近」の章から書き起こされ、東京の名所旧跡を紹介した後に、前年の版では冒頭に掲げられていた「湘南の風光」が続く。以下、東海、近畿、北陸をめぐったあと、「東北地方」の部となって、前年版と同様「多摩の里」以下、碓氷峠など信越方面の記述が続くことになる。

本書について中川浩²は「ツーリストの創出を狙った出版物」とし、記事中に「満韓巡遊券」への言及があることから、「国際的な観光旅行の組織化にも、目をむけていた事実」を指摘しているが、何よりも「韓国」の部を立てて「鷄林の勝」の章を縷々記述している点について植民地支配の観点から読み解くことが必要であろう。

しかし本稿の趣旨に添って身を縮めて文学への言及という観点から言っておこう。本書は前年版に比し、非常に視野を広く保って表現の伝統を意識し、俚謡も取り上げれば、平安朝の和歌、江戸時代の狂歌、そして正岡子規の俳句まで、時代と表現領域を横断したかたちで詩歌の引用も丁寧におこなった文学的・文化的伝統を強く意識した書冊だと言える。文中への和歌の引用も前版と同様二行に分かって、目に飛び込みやすい設えとなっている。

本書は同タイトルで八八ページ仕立てのものが翌一九一二年六月に刊行されている。版型は横長となり、縦二三〇ミリ×横二八〇ミリ。薄くなった分、削除されたところは多いが、「朝鮮の風光」「満州の山野」「台湾の風光」など植民地に関する項は、前年版よりも詳細になっている。一九一〇年版に多い詩歌の引用は削られた。一二年版、一二年版どちらも非売品（二〇年版もたぶん同様）だが、鉄道

院関係者以外のどういう範囲に配られたのかは把握できていない。

(以下続稿)

――注

- (1) 小関和弘「〈名所案内〉〈旅行案内〉と文学史蹟」〔和光大学表現学部紀要〕18号、二〇一八年三月
- (2) 中川浩「旅の文化史」〔伝統と現代社、一九七九年二月、204ページ〕